

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

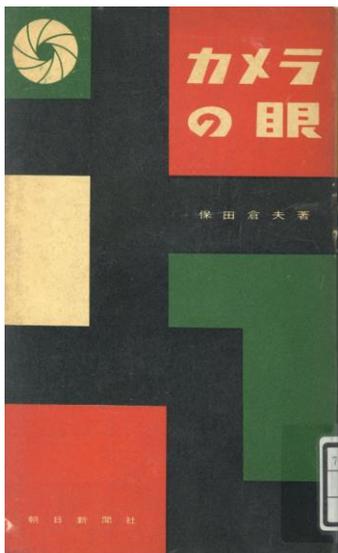
つむらひでお
津村秀夫（1907-1985）は、1931年に東北帝国大学法文学部を卒業し、東京朝日新聞社へ入りました。翌年から学芸部に配属され、「Q」の筆名で映画批評を担当します。専門誌ではなく幅広い層に向けた新聞ゆえに、簡潔かつ内容の良悪をはっきりとさせた辛辣批評で注目を集めました。このころをふり返って、後に『朝日新聞の自画像』（鱗書房・1955年）へ「映画評 Q」を寄せているほか、1970年代後半に至るまで映画美と鑑賞に関する書籍を多数著しています。



『アサヒカメラ』
1949年10月復刊号

1949年には、戦時休刊していた『アサヒカメラ』の復刊編集長に任命されました。津村は、1933年に開催された「ライカによる文芸家肖像写真展」の展評を担当して以来、旧知の仲であった木村伊兵衛に写真の見方に関する助言を求めるとともに、伊奈信男、渡辺義雄、金丸重嶺を紹介され、編集顧問的な立場で協力を受けました。当時の事情については、『木村伊兵衛写真全集』第2巻（筑摩書房・1984年）に「復刊『アサヒカメラ』と木村伊兵衛の登場」を寄せています。

津村の編集方針は、写真の持つ論理的、社会的任務と責任の自覚、アマチュアの育成にありました。また、海外情報網を持つ新聞社の優位性を生かして、戦争で情報が途絶していたアメリカ・ヨーロッパの写真家と作品の積極的紹介、プロとして活躍をはじめた新人写真家の発掘と育成、社会動態を分析できるテーマを考えたうえで制作する「本誌特写」を推進して大きく社会全般を見渡す眼の育成、それまで批評皆無であった写真界に対して一石を投じるべく、画家、評論家などによる「対談批評」の掲載などを行い、1957年3月号まで編集長として携わりました。



カメラの眼

津村編集長の活躍について写真評論家の重森弘淹は、『アサヒカメラ』1978年4月号増刊の「『アサヒカメラ』復刊以後」にて「復刊『アサヒカメラ』は、まさしく「Q」の作品だといっているほど、「Q」の個性が横溢していた」としています。

後に『アサヒカメラ』編集長をつとめた岡井耀毅は、連載評論「戦後写真と『アサヒカメラ』」（『NIKKOR CLUB』149号・1994年）にて、津村が「保田倉夫」の筆名を用いて写真展月評などを担当していたと明かしています。当時の誌面を見てみますと、保田倉夫は展評のほかに『カメラの眼』を1952年6月号から1957年6月号まで連載し、1956年に朝日新聞社から書籍化されています。内容は写真美学を主題として、写すまえにまず「なにを撮るか」「いかに撮るか」と、対象への考察を重視しており、「シャッター以前」を説き続けた津村の主張が感じられる内容です。